

情熱と共に語り継がれる 少年たちのロマン

●伊東満所（マンシヨ）

激動する戦国時代において、身も心も神に捧げ、清らかな信念に生きた司祭、伊東満所（マンシヨ）。わずか13歳にして天正遣欧少年使節の正使としてローマへと赴き、法王に謁見するという偉業を成し遂げた少年の情熱。その原点は都於郡にありました。

マンシヨは、1569（永禄12）年頃、伊東祐青の子ともして誕生しました。しかし、約8年後の1577（天正5）年、伊東氏は島津氏との戦いに敗れ、親戚の大友宗麟を頼って豊後（大分）に逃れて行きました。その中に幼いマンシヨ（幼名虎千代磨）の姿がありました。豊後国の府内においてマンシヨは、宣教師ペドロ・ラモンと出会いました。この出会いが10歳の少年の生涯を決定づける運命的な出来事となりました。

それから3年後、1582（天正10）年、長崎の港を出航する船の甲板に4人の少年の姿がありました。伊東マンシヨ・千々石ミゲル・原マルチノ・中浦ジュリアンです。彼らが運命を共にした8年半の長い旅の間には、日本人の彼らには想像もできない苦難や、素晴らしい出来事を経験し、彼らに勇気と感動を与えました。



Fr. Mancio ITO was born as the son of Sukeharu ITO, the landed daimyo of Hyuga Province at Tonokohri, South SAITO.

He was chosen to represent Sorin OTOMO and set out for Europe with a delegation known as the Tensho Embassy in 1582. They were received as nobles in Europe and sent back with many gifts. And finally Fr. Mancio ITO had an audience with the Supreme Pontiff.

そして、彼らは、ポルトガル・スペイン両国王のフェリペ2世、ローマ法王のグレゴリオ13世に謁見し、日本人としての品位ある態度を示し、使節としての使命を立派に果たしたのです。

このように、西洋で初めて日本を紹介し（日本を世界に知らしめ）、活版印刷機をはじめ航海術や西洋音楽（楽器）などを持ち帰り、日本に西洋文化を伝えました。

帰国後、関白豊臣秀吉の「バテレン追放令」発令下の日本でも地道な布教活動に生涯を捧げたマンシヨは、1612（慶長17）年11月13日、長崎のコレジヨの中にある聖パウロ学院の病室で、43歳の短い生涯を閉じました。